

作品タイトル

『人生が二度あっても』

元にした作品のタイトル

特にありません。

著者名

川瀬えいみ

あらすじ

高校生の私の家は、裕福とは言い難い母子家庭。お金がないことで、親友の茉莉との間に気まずいトラブルが起きてしまった。

友だちなどいない方が傷付かずに済むのかもしれないと考え始めた私の前に、二通りの人生——ひとりぼっちの人生と交流の多い人生を生きてきたという老女が現れる。

特記事項

人のいない夕暮れの児童公園のベンチで繰り広げられる会話劇になります。

本編文字数

4932 字

事の発端は、学校帰りに親友の茉莉と一緒に立ち寄った雑貨屋で見付けた小さなバッグチャームだった。皮の紐に高さ五センチくらいの砂時計がぶら下がってるんだけど、その砂時計、くびれが二カ所あって、三段構造になってるの。で、実際に三分間を計ることができる。そんな玩具の中に、きっちり三分の時間が詰まってることに、私は妙に心惹かれた。砂の色が けばけばしい人工色でないのもいい感じだったし。

でも、値段が千五百円。私には、「いいなあ。欲しいなあ」とぼやくことしかできなかった。

うちは、いわゆる貧困母子家庭なんだ。私が赤ん坊の頃、私のママとパパは離婚した。ママは建設会社の事務員として働いてるけど、私とママの暮らしは常にかつかつ。私は、高校に入学した時から大学進学は諦めてた。そんな我が家における千五百円は、私とママの一日分の食費に相当する。気軽にぽんと出せる額じゃない。

だから、私は、後ろ髪を引かれる思いでその場を離れたんだ。

一緒にいた茉莉も何も買わずに雑貨屋を出た。それが五日前。

そして今日、私は図書館帰りに見ちゃったんだ。

お母さんと一緒にケーキ屋さんから出てきた茉莉が肩に掛けてたバッグに、あのバッグチャームがぶら下がってるのを。

茉莉んちは、これからケーキで休日の午後のお茶会でもするのかな。

歩道に立つ私の姿を認めた茉莉は笑顔になり、右手を上げかけた。それから私が見詰めているものに気付いて、上げかけた手を途中で止める。バッグを両手で抱きしめて、気まずそうな様子で顔を伏せた茉莉。私はいたたまれない気持ちになって、無言で踵を返したんだ。

茉莉もあのバッグチャームを気に入ってたのなら、あの時、買えばよかったのに。なのに、茉莉はそうしないで、私に隠れてあとでこそこそ買いにいったんだ。十中八九、欲しいものが買えない私に気を遣って。

なんだろう。それは茉莉の優しさだと思うのに、私は無性に腹が立った。欲しかったなら、堂々と私の前で買えばよかったじゃない。ビンボーな私に遠慮して、こそこそ隠れて買われる方が、私は何倍も傷付くよ。

そりゃ、「じゃ、私だけ買うね」って、目の前で買われたら、私はいい気分にはならなかつただろう。けど、その方が何倍もましだよ。少なくとも、親友に憐れまれたことをあとから知って、こんなにもやもやすることはなかつたはずだもの。

私は何も言わず、ぷいっと回れ右しちゃったけど、茉莉、まじで気まずそうな顔してたな。

なんで、私は、こんなことで、いちいち傷付いてるんだろう。友だち付き合いつて、ほんと面倒。ビンボーって、まじで やるせない。

私は大通りの歩道をぐんぐん大股で歩いて、勢いよく角を曲がり、家の近くにある児童公園の中に飛び込んだ。なぜだか、マンションとは名ばかりの古アパートに帰りたくなかつたから。

晴れた日曜の午後なのに、公園内に子どもたちの姿はなかつた。寒いし、インフルエンザが流行ってるらしいしね。

古いブランコと滑り台があるだけの小さな児童公園。ブランコを漕いでいるのは子どもじゃなく、小柄な大人——おばあさんだった。六十歳——七十歳くらいかな？ 老人の歳って、わからない。白髪があるけど、染めていないみたい。いわゆるグレイヘアだ。

私は、そのおばあさんの横顔が見える位置にあるベンチに、細く息を吐くように腰を下ろした。

背筋がぴんと伸びてるのに、ブランコの女性に生気がないように見えるのは、ほうれい線のせいじゃなく、表情に陰があるからみたい。

でも、何か変だ。私、この人に どこかで会ったことがあるような気がする。

遊具を楽しんでいるおばあさんの邪魔にならないよう静かに座ったつもりだったのに、彼女はすぐに闖入者に気付いた。ブランコから降り、私が掛けているベンチの方にすたすた歩いてくる。私の前に立つと、彼女は私に尋ねてきた。少し枯れた声。でも、はきはきした口調で。

「こんにちは。お友だちの件はどうすることにしたの？ 絶交？ それとも何も見なかつたふり？」

「えっ」って、私、胸の中で声をあげちゃった。このおばあさん、なんでそんなこと知ってるのよ。

私が目をまん丸にして驚いたせいか、おばあさんは、ちょっとだけ声の調子をまろやかにした。

「あ、ごめんなさい。私はあなたとは『お久しぶり』だけど、あなたは私とは『はじめまして』なのね」

は？ まじで、この人、なに言ってるの？ 私、この人に前に会ったことある？ だとしても、この人の言ってることは変だ。

「あなたは、親友の茉莉さんとの間に距離をおくか、これまで通り親友のままにいるかを迷ってるんでしょう？」

「……」

この人が私を知ってるのは事実みたい。でも、茉莉とのことは——ほんの数分前に、私の心の中で生まれた迷いだよ？ もう一人の当事者の茉莉でさえ知らないことを、なぜこの人が知ってるの？

私は混乱した。その混乱をどうやって彼女に伝えればいいのかを咄嗟に思いつかないほど混乱した。つまり、傍目には泰然自若。無言不動の私に、彼女が重ねて尋ねてくる。

「私、あなたに、事の顛末を報告する約束をしたの。その約束を守りたいわ。話を聞いてくれる？」

「え……と、すみません。私、あなたを知らない——と思うんですけど」

「私を忘れるなんて」と詰られるかもしれないと思ったんだけど、そんなことはなかった。彼女は浅く頷いてから、

「通りすがりの変人の独り言だと思って聞いてちょうだい」

と言って、ベンチの私の隣に腰を下ろした。

私より十センチ近く背が低くて、私よりずっと肩幅の狭いお年寄り。腕力に訴えられる危険もなさそうだ。

私は、「はあ」と、ものすごく間の抜けた声で返事をした。

「私は、あなたと同じ母子家庭で育ったの。あなたも知ってるでしょ。お金の少ない生活のつらさを。『人間が幸せになるにはお金が必要不可欠』が私の信条だ

ったわ。毎日身を粉にして働いても暮らしは一向に楽にならず、節約節約の日々で……。生活費節約に最も有効な方法は何か、あなたは知ってる？」

おばあさんは軽く首をかしげて、私の顔を覗き込んできた。

しばし考えて、私が出した答えは、「おしゃれしないこと？」だった。我ながら、馬鹿な返事。

おばあさんには軽く笑われた。

「人と交流を持たないことよ。交際費って馬鹿にならない。ランチ一つにしても、自分でお弁当を作れば二百円。職場の同僚と外食すれば千円。飲み会に参加したり、友だちと外出したりすれば、そのたびに何千円とお金がかかる。社会人だと、冠婚葬祭のたびに結構な額のお金が出ていくし、まさに時間とお金の無駄遣い。人と接すると、いろんなことで心も傷つくしね。お金がないことに引け目も感じるし」

「……」

きっと、それは事実なんだろう。現に今、茉莉という友だちがいるせいで、私はもやもやしてる。この胸のもやもやは、お金があれば感じずに済んだはずのもやもやだ。

このおばあさん、実際に人との交流を断ったのかな。それって、人間関係リセット症候群ってやつ？

「私は、親しい友だちを作らず、恋人も作らず、当然結婚もせず、子どもも産まず、母と二人きりの暮らしを続けた。その分、仕事と資格取得に情熱を注いだから、それなりに評価されて、お金も貯まって、生活は安定したのよ。友だちはいなくても、私には母がいたしね。六十五歳の定年まで働いて、老後は母の介護をしながらのんびり暮らそうと思っていたの。けれど、先月母が亡くなって、私は本当に一人ぼっちになってしまった。生活に不安はないけど、だからかえって何をすればいいのかわからない。そうするうちに私は、人との付き合いが煩わしくても、貧しさに傷付くことがあっても、人との交流を断たずにいれば、こんな空虚な気持ちにならずに済んだんじゃないかと思うようになったの」

ここで「だから何？」と聞き返すことは、ちょっとできなかった。

「そんな時、ある人に、人生のやり直しができるサービスを提供するお店があると聞いたの。自分の人生を、指定時点から生き直しできると」

へ？

「私の時間を戻すというか、私の魂や記憶を過去の私に移殖することができるというの。とても胡散臭かったけど、他にすることもなかったから、私はその店を探して——私の時間を高校卒業時まで戻してもらった。そこから人生を生き直してきたのよ」

は？

私、まじで、ぼかーんとなった。この人、正気？ それって、クリスマス・キャロル——ううん、むしろ、SF？ それとも、異世界転生のライトノベルかな？

そんな荒唐無稽で馬鹿げた話を、どうしてこんな真面目くさった顔で話すのよ、このおばあさんは！

「私に生き直しの決意をさせてくれたのは、あなたよ。今日ここであなたと出会って、茉莉さんと友だちでい続けるかどうか迷っている話を打ち明けられた。それがきっかけ。私の生き直しが、あなたの判断の参考になるかもしれないから、試してみようと思ったの」

「……」

作り話に決まってる。私は常識人だ。そんな話、信じられない。信じることはできなかった——茉莉のことがなければ。

「高校を卒業して就職した私は、人を避けるのをやめたの。友人を作って、楽しく過ごした。いろんな人とたくさん遊んで、喧嘩もした、煩わしいことがたくさん起きて、いちいち傷ついた。恋もした。失恋もした。結婚もして、子どもも産んだ。夫の実家とは折り合いが悪くて神経を擦り減らしたし、近所付き合いではママ友とのいざこざに辟易した。実母だけでなく義父義母の介護問題に、夫の優柔不断。子どもたちの我儘は、愛しているのに苛立たしくて、心は休まらず。暮らしは一向に楽にならない。それでも今日までなんとか生きてきた」

「あ……」

彼女の話が嘘かどうかなんてことは、私、どうでもよくなった。そんなこと

より、私には知りたいことがあった。

つまり、「今のあなたは幸せなんですか？　ビンボーで生活が大変でも、一人ぼっちよりは幸せ？」ってこと。

私は、私に問われたおばあさんがどんな表情を浮かべるのか、じっと見守っていたんだけど、彼女の表情に変化らしい変化は表れなかった。

「十年前に義父——夫の父が亡くなったの。夫も昨年亡くなった。義母は存命だけど認知症で、何年も介護してあげた私のことなど全く憶えていない。二人の子どもは、それぞれ家庭を持って、今は飛行機の距離の土地で暮らしてる。近所の人たちも、引っ越したり、施設に入ったり、亡くなったりで、今も交流がある人は一人もいないわ。そして、先月母が亡くなった。結局、今、私は一人ぼっちなの」

「な……なに、それ」

その時になって私は、「お金がなくても、友だちがいれば幸せ」という答えが彼女から返ってくると決めつけていた自分に気付いた。

「にぎやかで楽しかった頃の記憶があるだけに、今は一人が身に染みる。とても寂しいわ。ずっと一人で生きていた自分より寂しい」

「そんな……」

「でも、一人じゃなかった頃の楽しい思い出が、寂しい心を慰めてくれるのも事実で……。だから、『どっちがいいか、わからない』が私の答えよ」

おばあさんは、穏やかな声でそう告げて微笑んだ。

「前回——四十七年前の今日、ここであなたと会った時、生き直しの結果を必ず報告すると、あなたに約束したのよ。これが私の報告。あなたの判断の参考になるかどうかはわからないけど……ともかく約束は果たしたわ」

一瞬、乾いた笑みを目元に浮かべて、おばあさんが立ち上がる。軽い会釈を残して、彼女は公園を出ていった。

いつのまにか公園内はオレンジ色と紫色のグラデーションに染まってて——私は一人でベンチに座ってた。キツネにつままれた気分で。

あのおばあさんが言ったことは本当だろうか。もしかしたら、即興の作り話で、私にアドバイスしようとしてくれただけ？

でも、だとしたら、彼女はなぜ茉莉とのことを知ってたの。私が彼女に（四十七年前の彼女に？）話したのだとしか思えない。

それに、彼女の報告は何のアドバイスにもなってない。結局、自分で考えて決めろってことだよ。まあ、それが正しい答えなんだろうけど。

明日学校で会う茉莉に、これまで通り笑って「おはよう」と言うか、言わないか。

夕日の中で、ひとしきり悩み、

「よし、決めた」

決意して、私は掛けていたベンチから立ち上がった。